

第 10 話：甘えの座布団はひとつだけ

夜も更け、寝室にやわらかな静けさが降りてくると、
まずやってくるのは、決まって金色の王子である。
アビイちゃん。アビシニアン。
薬師如来にして、甘えの申し子。
しなやかな身体は音もなく布団に乗り、
すうっとベッドの端に座る。
お母さんの目が開かれるのを、
ただ、じっと待つ。

「……来たの？」
声がかかれば、勝ちである。
背中をトントンされながら、尻尾を小さく揺らし、
ついにはお尻を向けて、夢のような時間が始まる。
うっとり、ふうっと、小さな吐息。
それは金髪の王子が、世界を許している合図だった。

だが、その夜。

ササッ——という布団のしわを裂く音とともに、
ビオラちゃんがやってきた。
マンチカン。地藏菩薩にして、茶トラの跳ねっ娘。
まるで「遅刻遅刻ー！」とでも言わんばかりに、
お母さんの胸にすぽんと入り込んだ。

アビイちゃんの耳が、横に流れる。
「うう……」それは唸り声というよりも、諦めの音だった。
足元に風のような気配を残し、王子は去っていく。
その背中とは、どこか誇り高く、どこか寂しげ。

ビオラちゃんは気づかない。
「ここ、ぬくぬくー♪」
お腹を見せて、お母さんの腕を小突く。
ごろん。すぽん。まるまる。

そして——追いかける。
去った兄の背を、たどるように。

お母さんの胸元に残されたのは、ほんのりとした体温と、
「どちらの気持ちも分かる」という、
人間の宿命のような切なさだった。

「甘えの座布団は、ひとつだけじゃないのに——」
そうつぶやくと、今度は白と灰のハチワレが、
ぽてぽてとやってくるのだった。